

〈腰折れ文〉十六、

渡邊澄子（会員）

前号よりはるかに大ニュース続出。まず沖縄知事選挙。翁長知事が文字通り命を賭した辺野古反対の後継者と、政府トップが大挙して応援した移設を進める候補者との一騎打ちだった。政府側候補の選挙は、フェイク演説やネットでの中傷、投票への動員など目に余る投票の自由の侵害に当たるといえる。この選挙は日本の在り方に関わる重大事なのに、NHKも民放も無視の態度をとり、当選後も新知事の横顔さえ伝えなかったのは「一強」への思惑か。情けなさ過ぎて涙も出ない。欧米識者ら133人が辺野古反対声明を出し、NYでも「辺野古NO」のデモが行われた選挙結果は「米、大差に『驚き』」と米国でも報道されたほどの大勝利だった。翁長知事の妻樹子さんの寄与も大だったが県民は

「誇り」を選択した。だが、政府は民意を無視して「辺野古が唯一」一辺倒。

うんざりだが内閣改造で第四次安倍政権誕生。顔ぶれを「身内」「論功」「在庫処分」と新聞は報じたが、斎藤美奈子の「茶番劇」、「見飽きたメンバー」と見たくない新閣僚の加わっただけの誰も責任をとらない厚顔無恥内閣、希望が見えない曇天内閣「は当を得たネーミング。長期政権はレームダック（死に体）に陥るとも。「女性活躍推進」が看板なのに、女性閣僚は首相の「可愛い子ちゃん」で問題の多い一人だけ。文書改竄問題ほか何かと物議を醸す麻生氏留任に非難轟々。世論もこの内閣の評価が対してわずか45・2割で、麻生氏留任反対は51・9割だったと報道。私は敢えて無知蒙昧あるいは無知文盲内閣と位置

づけたい。それが証拠に文科相が、文科相がですよ、就任記者会見で教育勅語は道徳教育に有効と評価の発言をしたのだ。「君一忠」が根幹の教育勅語は、帝国憲法や明治民法とともに差別を固定化し、植民地支配、人権抑圧の元凶であり、戦争に帰結して多くの人々を犠牲にしたのだ。「明治」を礼賛してはならない。安倍首相の妻昭恵氏が森友学園で児童の教育勅語朗唱に感動したとの発言は記憶に新しい。安倍首相はじめ閣僚15人が拠る日本会議は明治回帰を悲願とする組織だ。この組織の拡大現象は、『新潮45』休刊問題に発展し、論議の延々と続く現況を招来させている。「生産性」発言の差別議員を擁護する政府の姿勢が右翼を力づけている。

嬉しいニュースもあった。がん治療に新時代を拓いた本庶さんのノーベル医学生理学賞受賞に、思わず翁長さんの死を阻止してほしかったと思ってしまった。さらにノーベル平和賞が#MeToo運動の世界的うねりを背景に性暴力の根絶への強い意志から、性暴力

被害者の治療を続けている医師ムクウェゲさんと性奴隷として陵辱を受けて被害者代表として闘っている二十五歳の女性ムラドさんの受賞である。この世界の流れに反して日本は選択制夫婦別姓導入賛成派が反対派の29・3割を大きく上回って42・5割になったのに、法務省は、首相が反対の反対派が多かった前年度の数字を発表し続けている。

福島原発事故の犠牲者救済は終わっていない。原発の怖さが実証されたのに政府は原発政策を変えようとせず、供給力が需要を上回り電力が余る事態で九電が原発の発電を優先して太陽光発電を停止させたという。何たることだろう。

侵略政策本格化の前触れと言える大逆事件で、市民の尊敬の的だった大石誠之助が冤罪で刑死して百年。名誉市民として顕彰され、新宮市で開催の「大逆事件サミット」に三泊四日で参加した。強行採決された実質共謀罪の廃棄を叫びたい。